

# 教材と対話を組み合わせた、メディア・リテラシーの育成

## ー学校放送番組『メディアタイムズ』を活用してー

宮崎 誠 (川崎市立富士見台小学校)・中橋 雄 (武蔵大学)

概要：小学校5年生の国語科で、「教科書の教材文」「学校放送番組『メディアタイムズ』」「グループでの対話」を組み合わせた授業を実践し、メディア・リテラシーが育まれたか検討した。児童の意見文を分析した結果、多くの児童が複数のメディア・リテラシーの構成要素に関わる記述をしていた。児童は、教材の組み合わせやグループでの対話を通し、多様な考えに触れることによって、より多くの視点でメディアとの関わり方を考えることができた。

キーワード：メディア・リテラシー、メディア教育、ソーシャルメディア、学校放送番組

### 1 はじめに

近年、スマートフォンやタブレット端末の普及に伴い、インターネット利用者の低年齢化が進んでいる。また総務省(2018)平成29年通信利用動向調査の結果では、6~12歳のインターネット利用状況は73.6%で、そのうちの65.1%がスマートフォンやタブレット端末での利用となっている。今年度、本校の全児童を対象に行った調査では自分専用のインターネット端末を所持している児童は59%以上であり、インターネット利用者は全体の83%に上る。

そうした中、中橋(2017)は機器の利用とともに促進されることとなったソーシャルメディアを取り巻く構造や特性を理解したうえで、メディアと社会のあり方について考え、行動していく力を身につける教育が必要であると指摘している。しかし、文部科学省(2017)学習指導要領にはメディア・リテラシー教育が明確に位置づけられていないため、教育課程の中に意識的に編成していくことが重要とされる。

片岡ら(2018)は、小学校でのメディア・リテラシー教育において、対話を取り入れた学習の有効性を明らかにした。しかし、同様の研究は、あまり見受けられないため、検証を積み重ねる必要がある。本研究では、限られた教育課程の

中で、幅広くメディア・リテラシーを育むことを目指し、「教科書の教材文」「学校放送番組『メディアタイムズ』」「グループでの対話」を組み合わせた授業を実践し、メディア・リテラシーが育まれたか検討した。

### 2 研究の方法

#### (1) 調査対象および調査時期

川崎市立富士見台小学校5年生34名を対象に、国語科「想像力のスイッチを入れよう」(光村図書)の学習でメディアとのかかわり方に対する意見文を書く実践を平成30年7月に行った。

#### (2) 実践の概要

対話を促すための教材として学校放送番組『メディアタイムズ』第5回「フェイクニュースを見抜くには」を活用した。『メディアタイムズ』は小中学生を対象としたドラマ形式の番組である。メディアのあり方や特性を知識として身につけ、最後に「問い」について、学級で話し合いをすることで、「メディア・リテラシー」を育成することができるつくりになっている。番組を視聴して、「フェイクニュース」について「なぜそのようなことをするのか」「どのような対処ができるのか」を知る。視聴後に番組の問

いである「ネットにウソをのせたら罰するルールを作るべき」か「人を楽しませる冗談までなくなるルールはないほうがいい」について対話をする中で、教材文と番組の両方から得た知識やこれまでの生活経験をもとにして、より多くの考えに触れることをねらった。

#### 単元の流れ（全9時間）

- ① 生活経験を交流し、教材文を読み、メディアとの関わり方について意見文を書くための学習計画を立てる。
- ② 文章全体を三つのまとまりに分け、事例と筆者の意見（考え）を整理する。
- ③ 学校放送番組『メディアタイムズ』を視聴し、「フェイクニュース」について考えたことを、対話を通して交流する。
- ④ ②③の活動を振り返り、メディアとの関わり方に対する自分なりの考えをもつ。
- ⑤ メディアとの関わり方について、考えを意見文にまとめる。
- ⑥ 書いたものを友達と読み合う。

#### (3) 分析方法

##### ①対話についての質問紙調査

『メディアタイムズ』を視聴し、対話をした授業の後に質問紙調査をし、対話によって考えが交流できたかを分析した。その際、「そう思う」を4点、「少しそう思う」を3点、「少しそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点とし、平均点を算出した。

##### ②発言時間や対話の内容の分析

①と同じ時間で、対象学級から4名1グループとする2グループを抽出し、グループでの対話がどのように進められたか、対話の中で話題になった友達の考えが意見文に表れているか分析した。発言時間や対話の内容を確認するために、調査対象の机にマイクを設置し、「議論評価サービス（ハイラブル株式会社 <https://www.hylable.com/products>）」を用いた。

##### ③教材の組み合わせの効果の分析

教材文「想像力のスイッチを入れよう」の内容にかかわる記述があるもの、「フェイクニュース」にかかわる記述があるものを整理した。

##### ④メディア・リテラシー構成要素

メディア・リテラシーが育まれたか調べるために、意見文の内容を、ソーシャルメディア時代のメディア・リテラシー構成要素（中橋 2014, 以下メディア・リテラシーの構成要素）[3] に照らし合わせ、メディア・リテラシー構成要素にかかわる記述がされているかを分析した。

### 3 結果

#### ①対話についての質問紙調査

対話をした授業後の質問紙調査の結果から、「班で自分の意見や考えをしっかりと言おうとした」が3.39点、「班のみんなが自分の意見や考えをちゃんと聞いてくれた」が3.12点、「他の人と自分の意見や考え方が違っていた」が3.12点で、多くの児童が番組を視聴して考えたことを、交流することができたことを確認できた。

#### ②発言時間や対話の内容の分析

議論評価サービスによる分析の結果から、抽出した2グループについては、まったく対話に参加できなかった児童がいなかったことを確認することができた。

対話中の発言の総時間（グループ内での3段階評価）と、対話内容が意見文に反映されているかを分析した結果と、①の質問紙調査3項目の平均点を表1に示す。Aグループが児童1の発言を中心に対話が進められていたのに対し、Bグループは児童5、児童6、児童8に同じくらいの発言時間があった。このことから、Aグループに比べてBグループの方が望ましい対話が進められていたと言える。

表1 対話中の発言の時間と意見文への反映

A グループ	発言	意見文	質問紙
児童1	◎	○	3.3
児童2	○		2.7
児童3	○		3.3
児童4	○		3

B グループ	発言	意見文	質問紙
児童5	◎	○	3
児童6	◎	○	3.7
児童7	○	○	3.7
児童8	◎		4

※発言：発言時間を◎○△でグループ内評価

意見文：対話の内容が反映されていれば○

質問紙：①の質問紙調査3項目の平均点

### ③教材の組み合わせの効果の分析

意見文と教材のかかわりを表2に示した。教材文と番組の両方から得た知識を組み合わせ、意見文を書く児童が多く見られた。

表2 教材の組み合わせと意見文とのかかわり

教材文の内容にかかわる記述	8 (A)
「フェイクニュース」にかかわる記述	3
両方にかかわる記述	21
どちらともいえない、その他	2

### ④メディア・リテラシー構成要素

図1のように、意見文の記述にメディア・リテラシー構成要素にかかわる記述のある段落を1点として集計したところ、一人当たりの意見文は平均2.56点となった。また、全体の点数をメディア・リテラシー構成要素ごとに表3に整理した。

記述されている内容に差はあるものの、「(1)メディアを使いこなす能力」以外の6つの項目のいずれかにかかわる内容の記述がされていた。複数のメディア・リテラシー構成要素にかかわる記述のある意見文の内

容からは、教材文から考えたことと、番組の視聴や対話から考えたことが書かれていたことが確認できた。(図2)

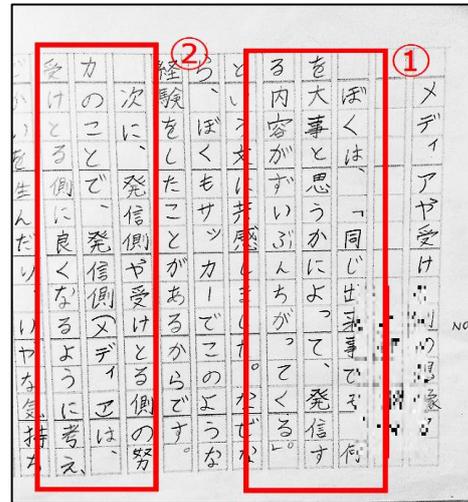


図1 意見文と構成要素にかかわる記述

表3 メディア・リテラシー構成要素と記述点

メディア・リテラシー構成要素	点
(1)メディアを使いこなす能力	0
(2)メディアの特性を理解する能力	22
(3)メディアを読解、解釈、鑑賞する能力	7
(4)メディアを批判的に捉える能力	29
(5)考えをメディアで表現する能力	14
(6)メディアによる対話とコミュニケーション能力	4
(7)メディアのあり方を提案する能力	6

発信するときには見る相手の気持ちを考えて、受け取るときも相手の気持ちを考える。また、インターネットなどで発信されるフェイクニュースは、すぐに信じるのではなく発信元を確認する。

図2 児童の意見文（一部抜粋）

## 4 考察

先行研究で明らかになっていた、対話の有効性については、本研究でも再度確認できた。結果②では、活発に対話が進められていたBグル

ープの方が、対話の内容を意見文に反映させている児童が多いということを確認できた。調査対象が少ないが、Bグループのアンケートの平均点が高かったことから、ある程度信頼できる結果だといえる。

結果③④からは、「教科書の教材文」「学校放送番組『メディアタイムズ』」「グループでの対話」を組み合わせることで、児童がより多様な視点でメディアとの関わり方を考え、意見文を書くことができたことが分かった。

## 5 結論

教科指導の中で、メディア・リテラシーを育むためには、教材と対話を組み合わせることが効果的である。本実践では教材文「想像力のスイッチを入れよう」を読み、メディアとの関わり方の意見文を書くという課題を設定した上で、番組を視聴することで、番組の問いをより自分事としてとらえ、対話にのぞむことができた。また番組の視聴を通して「フェイクニュース」という新しい言葉に触れることで、対話の幅を広げることができたとも考えられる。

## 6 課題と展望

本研究ではより多くの考えに触れ、メディア・リテラシーの定着を図るため、実践の最後に意見文を読み合う活動をした。しかし、結果④からもわかるように、メディア・リテラシー構成要素には偏りが見られ、本実践では学級の児童全員が特定のメディア・リテラシーを身につけたとはいいがたい。また、フェイクニュースに関する知識やそれを判断するための方法について考えることはできた子はいたが、フェイクニュースをなくすために、具体的な提案するまでには至らなかった。そこに到達させるために、対話活動における課題の提示や、思考ツールなどの手立てを改善する必要があると考えられる。

これまでの研究から、メディア・リテラシーの育成には教材と対話を組み合わせた授業が有

効であること、対話を促す教材として学校放送番組の活用が有効であることが分かった。冒頭でも触れた通り、これらをより計画的に実施できるよう、教育課程の中に編成し、検討していくことが今後の課題である。

## 参考文献

- 総務省（2018）総務省平成29年度通信利用動向調査(<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html>)
- 中橋雄（2017）メディア・リテラシー教育～ソーシャルメディア時代の実践と学び～、北樹出版、東京、p3～29
- 文部科学省（2017）学習指導要領
- 片岡義順、中橋雄、古田尚磨、三井広樹（2018）メディアのあり方を提案する能力を育む指導方法の研究

## 付記

本研究は、パナソニック教育財団の助成を受けて行われた。